

大正十三年

七月

△バラックは室内九十五度で、午前十一時過ぎはもう仕事も何にも出来ませぬ、今年の夏の苦しみは誠に今から想像がつかます。本所のバラックの不良状態を研究しましたところが、五千二十一戸の直に改良を要すべき不良住宅が見付かりました。この状態では今年の夏の病死者は頗る多いことであらうと考へます。老人などで、あの焦げつく焼けトタンの下に住んで居る人などは、病気になるれば、とても救はれないであらうと考へます。祈らざるを得ませぬ。

△あまり急がしいので、近頃は読書の時間も書く時もなくなり、弱つてゐます。

△此夏はまた大勢のボランチャイが助けて下さるそうですから、調査に、救済に賑やかに働けることと今から楽しみにして居ります。私はもう八月のプログラムをきめられて、休みも無く馬車馬の如く一本軌道を去らさせられます。

△松倉町に居ると毎日数人の身上相談を受けます。それらの人々のお世話してゐるだけで、一日の仕事が充分あります。その代り私は何にも出来ませぬ。私はお世話することの喜びを持つと共に更に労作の出来ぬことを悲しんで居ります。

△松倉町の仕事もだん／＼進んで、寄宿舎の建築にも愈々取かゝることになりました。

△私は少し暇があれば、纏つた書物を書きたいと思つて居りま

す。それが出来ないのが悲しく思はれます。人が充分読み、充分書く暇を持つてゐるのが羨しく感ぜられます。然し明治四十二年の冬から今日までいつも今の様に急がしく続いたのだと思へば、自分ながら、不思議に思はれます。

△四ツ谷鯉ヶ橋の野口幽香女史は二葉幼稚園の創設者として有名なかたですが、上流婦人の伝道に随分力を注いでゐられます。そこに集る人々は多く華族の夫人達であります。なかには実に熱心な方も居られます。戸田子爵夫人などは最も信仰に燃えた一人で摩訶炎の痛みに苦しんで居られるにかゝわらず、実に驚く程の忍耐と勝利を持つてキリストの祈を祈りとし、「み心の儘になさせ給へ」と病床で祈りつづけられてゐます。私は或朝同姉を病床に訪れてその美しき信仰に大いに教へられた事でした。同姉の上に、神の祝福を祈ります。

△私の人気を気に病んで、或雑誌が大きな新聞広告に「現代の青年子女を迷はず賀川豊彦」と題して、私に公開状をくれましたが、私の人気取りをいかぬと云ふのです。何をしても新聞が一々私の行動を報告するものですから凡てを悪いと或人は考へるらしいのです。別に人気を得るためにしてゐるのではなく、ただキリスト教を説きそれを実行してゐるだけなのですが、それが人気の元となるなら、キリスト教がもう少し人気の中心にならねばならぬ筈です。どうせ、一世にありては難みを受けん」とある通り、いつも人に可愛がられるばかりが、本分とは思ひませぬから、もう少し憎まれもし、苦しませませう。然し私は存外、人の批評には平気です。

△ジョン・パリスの小説「きもの」を読んで私は美によく書けた

小説だと感心しました。なるほど、日本人をあれほど悪罵すれば痛快でせう。白人から見ても、黄色人種はあゝも見えるであらうと私は考へました。もしも日米間の問題が永遠の問題であるとすれば、一きもの一に現れた排日気分が、その根本的動機だと私は考へました。私はあの中に現れた恋愛などには少しも感心しませんでした。娘の性格などは少しも描かれてゐないので、それで、私は恋愛小説として読まないで、日本批評としてあれを読みました。折々は日本の悪口を聞く必要もありません。

△松沢村に来ますと、青い森や畑にいき／＼します。今年はこの処に多くの子供を連れて来て、遊んで貰ひます。然し此処でも日中は相当に暑いので、机を狭い座敷中引つり廻はして原稿を書きます。

△光の園托児所は実に立派なものが出来ました。あれを二、三年の中に取払ふことは惜しいと思ひました。あしこで子供等が遊べることはどんなに幸福かも知れません。

△早いものです、坊やが生れて一年六ヶ月になります。坊やは貧民窟から持つて来た気管支炎を松沢村の善い空気で癒さうとしてゐます。紫外線にあてるために裸体で外に出します。坊やが松の木に登ります。そのために四肢をまつやにで真黒にします。私は村に来た吾兒を見て、貧民窟のお児供衆に心より同情いたして居ります。夏のテント避暑はこの意味からも有意義だと考へて居ります。

△神戸の事業は「死線を越えて」の印税で一万五千円財団法人として置きましたが、財団の外に伝道もあるので毎月どうしても現在でも五百円は経費にゐります。それを私は一生懸命に祈りつゝ筆を持つて維持して居ります。幸にも妻の妹の芝八重子が女子医学専門学

校を今年の秋に卒業しますので、神戸に行つてくれることと思つてゐます。伝道の方は武内勝兄が十年一日の如くやつてくれてゐます。△私は本所で、一千名の集まる礼拝所の与へらるゝことを祈つて居ります。みなさんも私のために祈つて下さい。

△今井よね子女史が私達の為に献身して下さいました。同女史はお茶水高等女子師範学校を卒業せられて後、北越の滑川女学校の教授を長くしてゐられましたが、あの地で実に驚くべき忍耐で伝道せられ、遂に昨冬、彼地を辞職せられて、我等のために奉仕して下さいましたのであります。私は同志の一人として今井女史の敬虔な態度に常に敬服してゐるのであります。どうか神が同姉を導いて、善き指導者として貧民窟の真中に据え給はんことを祈るものであります。セトルメント・ウオークは男の仕事より女の仕事の方になす可きことが多いのでありますから、同姉の如きしつかりした方がその方面に熟達せらるゝならば、どれだけ善き仕事が出来るか知れませぬ、私は同女史の新しき出発を心より祝福せずには居れぬものであります。

△私は貧民窟で一緒に働く同志とは、長く一緒に居る兄弟とは、多少欠点が有つても仲間として家族的に付き合つて来ました。その為、初めて接せられた方は私が欠点の多いものを引立てゝ行くのに対して変に思はれるかも知れないと思ひます。然し、一旦同志だと名乗つた以上、そして一年以上一緒にやつてみて、その長所短所がわかれば、そんなに簡単に離れられるものではありません。私は与へられた同志はたとひ叛かれても願ひます。

△然し私は長年貧民生活に気が荒くなつて居るために我ながら耻

しいような言葉使などにいつも後悔いたします。凡てを天父に赦して戴くより外はありません。

△理想の生活を送れなければ生きないがましです。現実に仰合して戦ふことを忘れ、ただ世間並の生活であれば私は私達の団結を直に解散させよう。そのために多少いつも奮励せぬばならぬと私は考へて居ります。私はかく祈り、かく努力いたして居ります。天の父様どうぞお助け下さい。アーメン

(大正十三年八月号「松介町のバラックより」)

八月 旅に出ると、うれしいことはひとりになることであ

る。ひとりて考へひとりて読み、ひとりて自然をながめる。八月四日の朝、私は七時四十五分東京駅発の下り列車に乗つて、レニンの帝國主義の批評を読み出した。朝から午後五時頃までに——眼の悪いのを気にしながら二百頁位を読み通した。五日の朝神戸を出る時にはカペンターアの「恋愛論」とウオルター・ペーターの「プラトン及プラトニズム」二冊を手に出した。カペンターは二、三時間で肝要なところを読み了つた。あれで日本語で百頁以上も読んだであらう。「プラトニ論」は少し丁寧に読んだので暇がかゝつた。岡山から津山まで出る間ウオルター・ペーターに読み入つた。

レニンにも感心し、カペンターにも同感であつた。然し別に新しい発見は少しもなかつた。ペーターはギリシヤ学者だけに私の知らぬことばかり書いてくれてある。日本でギリシヤの学問をするとは頗る無理な注文かも知れぬ。ギリシヤ文化は西洋に取つては、漢字文化と同じことである。それにしても西洋の古典と云ふものは

頗る進歩した研究を持つて居る。

私は今度の旅行で山陽道の谿谷文化を比較研究する機会を持つたことを喜ぶ。八月五日私は午後一時から加古川の流域を溯つて、厄神から三木町に出た。三木は小さい城下であつたのだ。その夜、私は加古川の公会堂で話をした。

翌日、私は揖保川を十二、三里溯つて、神戸村と、西谷で講演した。そして、七日は中国線で、美作の津山まで這入つて行つた。私はこの三つの谷を比較し、またこの前に昇つて行つた市川の流域、神崎川の流域などを比較して、谿谷文化の比較社会学が出来るように思はれる。

揖保川の流域などは随分貧乏で、白壁を見る事は稀であるが、津山行の沿線には白い壁の庫が並んでゐて、それが夕日に照り返して頗る美しい。大体に於て、谿谷は貧乏である。

面白く思はれることは、その谿谷が旧くから開けてゐたと見えて、小大名が沢山所々に散在せしめられてゐる。それらの南北に流れた谿谷の文化とそれに配置せられた小大名の關係を調べて見ると頗る面白いと思ふ。

私は播州宍粟郡山崎町から美作の国津山まで出ようと努力したが、その日山崎の自動車運転手が点呼で留守であつたために、それが果せなかつたのは残念なことであつた。

私がある途を取りたかつた理由は、山中鹿之助に關係のある佐用の三日月城趾を訪ひたかつたからである。

私は山中鹿之助のローマンスが随分好きである。尼子の一族が亡びる光景と房州の里見の亡びる光景が、善く似てゐるように、私に